

研修報告書 No.30

所 属： 昭和大学横浜市北部病院

氏 名： 伊藤 杏奈

研修先： 医療法人聖真会 渭南病院

特定医療法人長生会 大井田病院

東京からいちばん遠いとも言われる高知県土佐清水市の渭南病院、また宿毛市の大井田病院、四万十町の大正診療所で2019年12月の1ヶ月間研修させていただきました。

私は高知大学を卒業後、育ててもらった高知を断腸の思いで離れ、地元横浜に帰りました。高知大学を卒業した後は1ヶ月も長逗留したのは初めてで、高知空港を出た瞬間の空気、土佐弁の訛りがとても懐かしかったです。

研修内容としては、渭南病院では一般外来診療、救急外来診療、病棟管理、訪問診療、手術、転院搬送の同乗、消化管内視鏡検査、検死、住宅評価を、大正診療所では一般外来診療、訪問診療、訪問看護の見学研修を、大井田病院では一般外来診療、救急外来診療、訪問診療、訪問看護を中心に様々な経験をさせていただきました。また大井田病院ではオーストラリアの学生の実習とも重なり、改めて日本の地域医療も含めた医療、保健、医学教育について考えるきっかけとなりました。

プライマリ・ケアの診療スキルの鍛錬はもちろんのこと、現地で肌で、空気で、舌で、感じたことが多く、伝えたいことがたくさんありますが、今回は特に地域性について、またプライマリ・ケアについて報告したいと思います。

一般的な都会と比較して高齢な方が多く、患者さんでもその割合が高いこと、自家用車や家族の介助がないとアクセスできない山や海沿いの地域があること、高度医療を受けるために紹介される大病院が車で数時間の場所にあること、大型の南海トラフ地震や津波を想定し備えていること等の背景がある一方、医療者が集落の場所や大体の世帯数を把握していたり、異職種スタッフ間の連携が強い等の取組が行われており、高知県西部、幡多地域の環境は、東京、神奈川にいては考えることもなかった環境でした。幡多弁を看護師さんに同時通訳してもらいながら行った外来診療、汲み取り式トイレなので便の性状がわからないと言う患者さん、県外から単身で来たお遍路さんの交通事故、患者さんから魚もらったエピソード。現地の先生方にとっては日常かもしれませんが、とても興味深い環境でした。

また、普段大学病院では研修できないプライマリ・ケアの研修を行うことができました。外来で診るのは内科疾患だけでなく、皮膚科疾患や整形外科疾患など多岐にわたり、一見、緊急性のない主訴で受診された患者さんの中から高度医療を必要とする人を的確・

適時に拾い上げなければならないという難しさを感じました。

高知の学生も含む医療者の方々は日頃から高知県の医療の特色を意識しており、”高知県は、ひとつの大家族やき。”という言葉の通り、医療者ひとりひとりが使命感を持って医療に貢献し、連携しているのを感じます。

地域医療はへき地医療と同義ではない、全国どこにでも存在して、それぞれ工夫を凝らして実践されているという大学時代に教わった講義の中の言葉をずっと覚えています。楽しい旅行だったと思い出にするのではなく、では今、自分の勤めている地域の地域医療はどうなっているのかを探求し、高度医療だけでなく、広い視野で医療を見つめるきっかけとなりました。

私の第二の故郷である、大好きな高知県で研修させていただけたことに感謝し、今後の診療に生かしていきたいです。

今回の研修で出会った先生方、医療スタッフの皆様、高知医療再生機構の皆様、地域の皆様、ありがとうございました。